ピッチドロップ

河野ミチユキ

登場人物

ミヤハラ　……熊本工科大学　環境設計学科３年生
ホトリ　……ミヤハラの在籍するゼミの坂本教授の妻。頭部だけで生きている。
ミドリカワ　……坂本ゼミで研究する大学院生
ナギサ　……福岡に住むホトリの実妹

あらすじ

平成二十八年四月、二度の震度七以上を記録した熊本地震。十六日未明に起きた本震と呼ばれる強い揺れから二日経過した、ある大学の一室。学生のミヤハラがその部屋で見たのは、頭部だけで話しかけてくるひとりの女だった。

教授の妻であるその女（ホトリ）は、暗い表情のミヤハラとは違い、とてつもなく朗らかで強さを感じる陽気さがあった。ホトリとの会話の中で、ミヤハラの中の言葉にならないとまどいもほぐされていくようだ。

実験器具を避難させていた研究助手のミドリカワや、駆けつけたホトリの妹ナギサも加わって、それぞれの瀕している状況が見えてくる中で、夫である教授と、妻ホトリの間の夫婦愛がじわりと滲み出す。

地震直後の、ニュースにならない当時の日常会話をふんだんに散りばめて、当時の熊本の雰囲気を伝える。

二〇一六年四月十八日

夕方の熊本市。
熊本工科大学の研究室の一室。
大きな本棚。PC。コーヒーメーカー。
雑然としている。理系の研究室の雰囲気を感じるのは、
実験に使うような器具が散見されるからか。
雑然としているとは言え、ある程度片付いている。

ミヤハラ　あれ？

学生らしき男・ミヤハラがおそるおそる部屋に入ってくる。
部屋の中を入口の所から、ぐるりと見渡し、

ミヤハラ　片付いてる……？

ゆっくりと部屋に入ってきて、きょろきょろと、
しかし特定の何かを探しに来た様子である。

ミヤハラ　ん……ない？なくなってる？

と、本棚から声がする。
正確には、本棚の一部に布が掛けられているが、その方向から、である。

女の声　だずげでー！
ミヤハラ　……？

ミヤハラ、声の方向へ恐る恐る近づき、ゆっくりと布をめくり上げる。
本棚の中程に、人の頭のようなものが収まっている。
つむじがこちらを向いている。つまり、その顔は下を向いている。

ミヤハラ　……人だ。人だ、大丈夫ですか？
女　　まず、起こして、起こして！
ミヤハラ　起こす？
女　　話はそれからだ！
ミヤハラ　あれ？

部屋が暗いのか、ミヤハラは女にかなり接近して、その奇妙さに気付く。

ミヤハラ　あれあれあれあれ。
女　　わかる、わかるよ、その反応。でも、とにかくまずは私を起こしてくれたまえ！
ミヤハラ　はぁ、はい。

ミヤハラの方も意外にすんなりと、その頭に手を伸ばす。
女の頭が起こされて、本棚に整頓される。
頭に倒れかかっていた周囲の本なども整理する。

女　　おぉ。ありがとう！

女、満面の笑顔である。奇妙なことに、肩から下がない。
頭だけの女が、混乱した表情のミヤハラに話しかける。

女　　ん？ここの？

ミヤハラ　はい。
女　　学生さん？
ミヤハラ　そうです。
女　　ほら、あそこのコーヒーメーカー、使い方わかる？

女、視線で部屋のコーヒーメーカーを示す。

ミヤハラ　わかりますけど。
女　　私、コーヒー飲みたいな！
ミヤハラ　え、飲めるんすか。
女　　むふふー、私がコーヒーを飲めるか、確かめてみない？
ミヤハラ　はぁ。
女　　もう！血が騒げよ！研究者だろ！
ミヤハラ　学生です。
女　　ぎゃーぎゃー騒ぐのは困るよ、でもさ、せめて血は騒ごうよ！
ミヤハラ　……はぁ。

ミヤハラ、リュックを降ろし、
コーヒーを淹れる準備を始める。

女　　手慣れてんね。
ミヤハラ　結構、俺、係っすから。
女　　コーヒー係？
ミヤハラ　みたいなもんす。……水、

ミヤハラ、コーヒーの側に置いてあるペットボトルの水を目にして、

ミヤハラ　水、これ……使ってもいいんですか？
女　　うん、それ今朝開けたヤツだから。
ミヤハラ　コーヒーなんかに使っちゃっていいんですか？
女　　いいよ。あぁ……水、持ってる？
ミヤハラ　あの、自分はなんとか。
女　　本当？
ミヤハラ　はい本当に。

ミヤハラ、担いでいたリュックから水のボトルを一、二本出して見せる。
女、それを確認してホッとした顔で、

女　　……私、ホトリ。

ミヤハラ、それに対して会釈で軽く答えたが、ふと手を止め彼女を振り返り、

ミヤハラ　……あれ？
ホトリ　　ん？
ミヤハラ　教授の奥さんの？
ホトリ　　知ってた？
ミヤハラ　一度、お宅にお邪魔したことがあります。
ホトリ　　あー、そうなんだ？
ミヤハラ　夕飯をご馳走になって。
ホトリ　　そうだったっけ？ゴメン、ウチお客さん多いから。
ミヤハラ　でもちょっとすぐわからなかったです。
ホトリ　　ん？

ミヤハラ　いや、今、その、お顔見ても、ってことですけど。
ホトリ　あら。
ミヤハラ　あぁ。そうかぁ。……そうかぁ……

ミヤハラ、コーヒーメーカーのスイッチを押そうとしていた手を止めて、
ホトリに向かって、

ミヤハラ　何て言ったらいいのか、あの、そんなに変わり果てたお姿になって……
ホトリ　変わり果てたよねー！
ミヤハラ　はい。えーっと……あー……だから、わからなかったのかもしれません。
ホトリ　だから？
ミヤハラ　いや、ちょっとあの、今、ようやくなんですけど、自分、混乱してきてるっていうか、ん、えーっと、
ホトリ　君、名前は？
ミヤハラ　え、あ、ミヤハラです。
ホトリ　ミヤハラくん。
ミヤハラ　環境設計学科三年のミヤハラです。
ホトリ　ミヤハラくん、落ち着いて考えるためにも一旦、コーヒー。淹れようか。
ミヤハラ　……そっすね。

ミヤハラ、メーカーのスイッチを入れるが、電源が入らない。

ミヤハラ　あれ、電源が入らない。
ホトリ　ななんと！
ミヤハラ　え、何でだろう。
ホトリ　なんでだろうー、なんでだろうー、

ミヤハラ　……。
ホトリ　……え？
ミヤハラ　陽気ですね。
ホトリ　こんな時こそ、明るく居るに越したことはないよ！
ちょっとねぇ、コーヒー入ったらゆーっくりいろいろと考えていいんだから、
まずはコーヒー淹れることを考えよう。私、口しか出さないで手伝えないですけど。
ミヤハラ　……そうですね。
ホトリ　なんせ、頭しか無いもんで！
ミヤハラ　そうですね。
ホトリ　えへへ。

ミヤハラも釣られて少し笑った後、電源が入らない原因を探す。

ホトリ　あれから……っていうか、私も来たの次の日だけど、
この部屋に来た学生さん、ミヤハラくんが初めてだよ。
ミヤハラ　そっすか。
ホトリ　来てくれて助かったわぁ。
ミヤハラ　はい？
ホトリ　私、今日ずっと下向きかと思ってたからさ。
ミヤハラ　なんであんなんなってたんですか？
ホトリ　余震でさ、結構揺れるじゃない、回数。
ミヤハラ　そうですね。
ホトリ　揺れる度に緊張してたんだよ……私、転がり落ちるんじゃないかって。
ミヤハラ　自分で支えられないですもんね。
ホトリ　本当よ、もう……ん？何か大切な用事があったの？

ミヤハラ　いえ、様子見に来たんです、授業とかどうなるのかな、って。
ホトリ　ふーん。学生も構内に入れるんだ。
ミヤハラ　入れなかったんですか？
ホトリ　ん？本当は入っちゃダメなんじゃないかな？まだ危ないよ。
ミヤハラ　あ、そうなんですかね？
ホトリ　たぶん。
ミヤハラ　あぁ、そうなんだ……

ホトリ、何かミヤハラがここに来た訳があるのではないかと感づいた様子で、

ホトリ　ん、まぁ……いらっしゃい。
ミヤハラ　お邪魔します。
ホトリ　って、ここは私んちじゃねー！じゃなくて、いや、別にツッコンで、って言いたいわけでもないんだけどさ、
「え、じゃなんでホトリさん、ここに入ってるんすか」とかあるでしょ、普通……

ミヤハラ、電源コードが繋がってる先を探っていたが、
同じコンセントからとられているパソコンにも電源が入らないことに気付き、

ミヤハラ　……あのー、電気が来てない、のかな。
ホトリ　な、な、なんですってぇ！
ミヤハラ　えっと、あの、ホトリさん、でいいですか？
ホトリ　よろしい！
ミヤハラ　さっきからいろいろとツッコもうって口が開きそうではあるんですが、
その刹那に、本当にいろんなこと考えちゃって頭の中忙しくて。だから、
ホトリ　うん。

ミヤハラ　だから……意地でもコーヒー、飲みましょうね。
ホトリ　……うん！いいじゃんいいじゃん！

ホトリ、満面の笑み。
と、ホトリのすぐ横に、充電クレイドルに立てられたスマートフォンが鳴りだす。
それに呼応してホトリが叫びだす。

ホトリ　でんわ！でる！でんわにでる！つうわ！わたしはでんわにでたいです！えーっと、
　でんわ！でんわをとる！
ミヤハラ　何してるんですか？
ホトリ　つうわ！はい、ホトリです！わたしはホトリです！わたしが、サカモトホトリです！
　でんわにでるつもりはじゅうにぶんにあります！でんわ！つうわ！
ミヤハラ　え、え、どうすればいいんですか？

電話、鳴り止む。

ミヤハラ　え、今、どうしたらよかったんですか？
ホトリ　ぜぇ……ぜぇ……ぜぇ。
ミヤハラ　電話……取ってよかったんですか？
ホトリ　あ、そうか！そうだよね！

ホトリ、息が上がりながらも、表情が明るくなる。

ホトリ　いやぁ、電話鳴るでしょ、でもほら、指でシュンってやれないから、
ミヤハラ　そりゃまぁ、そうですよね。
ホトリ　最近の電話って話しかけたら取れるんじゃないかって、電話がかかってくる度にいろんなワードで

試してみてるんだけど。
ミヤハラ　叫んでましたよ。
ホトリ　マイクの感度が悪いのかなって思ってさ。
ミヤハラ　後半、自己紹介みたいになってましたけど。
ホトリ　出来ないのかなぁ。
ミヤハラ　いやー、うーん、電話は声では受けることは出来ないんじゃなかったかな……
ホトリ　ギャー！私、今日一日頑張ったんだけど！
いや、見たことあるよ、「誰々にメール」とか口で言ったら勝手にメール送ってくれるみたいなCMとか。
ミヤハラ　いや、電話とるのは出来ないと思います。
ホトリ　マジか。あー、一日叫び損だったぁ。
ミヤハラ　いえ、すごいチャレンジ精神です。
ホトリ　そうかね。君もそう思うかね。
ミヤハラ　うん、さっきから度々出てますけど、
ホトリさんってそんな探偵みたいな話し方でしたっけ？
ホトリ　探偵？
ミヤハラ　探偵っていうか、博士？
ホトリ　あぁ、旦那の留守を守ってるわけだからね。
ミヤハラ　いや、教授もそんな喋り方じゃないっすから。
ホトリ　今私がここで出来る、限られたおもてなし、ですよ。
ミヤハラ　あぁ……ホトリさん、今の電話、確認しましょうか？
ホトリ　うん、いい？
ミヤハラ　携帯見ていいですか？
ホトリ　うん、大丈夫。ありがと。

ミヤハラ、携帯を持ち上げ、画面を操作してホトリに見せる。

ホトリ　ん、ナギサか。（ミヤハラに）妹。
ミヤハラ 電話、かけましょうか？
ホトリ　ううん……いいよ。かけなくても大丈夫。
ミヤハラ 今日の履歴、遡ります？
ホトリ　うーん、大丈夫大丈夫、旦那が帰ってきたら全部メール返してもらうから。
ミヤハラ 見るだけ見ます？
ホトリ　見たら大変だから。返事したくなっちゃうから。
ミヤハラ いや、した方がよくないすか？
ホトリ　大丈夫大丈夫。
ミヤハラ ……いいですか？……あ。

携帯を見ていたミヤハラ、

ミヤハラ 携帯……充電されてますね。
ホトリ　うん、してるよ、そこに指して、

ミヤハラ、クレイドルに携帯を戻す。
充電状態になる。

ミヤハラ ……電気来てますね。
ホトリ　あ、そうだね。
ミヤハラ こっちに移動させればいいかな。
ホトリ　ん？
ミヤハラ コーヒー。

ミヤハラ、コーヒーメーカーのコンセントを抜いて、
ホトリの側へ持って来る。

ホトリ　え！こっちに？怖い怖い怖い！
ミヤハラ　大丈夫ですよ。
ホトリ　真横はやめてよ！
ミヤハラ　少し離して置きますから。
ホトリ　それ倒れたら私、火傷するから！
ミヤハラ　（スイッチを入れて）わかりました、わかりましたって。
ホトリ　怖い怖い怖い怖い！
ミヤハラ　ホトリさん、水とかどうしてるんですか？
ホトリ　水？ん？喉？
ミヤハラ　はい。
ホトリ　あー、そういえば……あんまり渇かないね。
ミヤハラ　飲めるんですか、本当に。
ホトリ　うん、だから、それをこれから試してみようと思っているわけだが。
ミヤハラ　だが。
ホトリ　……研究室、という名の部屋にいると、探究心芽生えちゃうね。
　探究心しか芽生えないね。
ミヤハラ　そうですか。ハハ。
ホトリ　乾いた笑い。

ガサゴソと、ドアの外で音がする。
二人、ビクッと反応し、声を潜めて、

ホトリ　ねぇ。
ミヤハラ　……はい。
ホトリ　もしも旦那じゃなかったらちょっと私を隠して。
ミヤハラ　え？
ホトリ　たぶん、いろいろ混乱するから。
ミヤハラ　はぁ。（ドアに向かって）はい！
男の声　あれ？誰？誰か居ると？
ミヤハラ　ドリさん？
男の声　え？
ミヤハラ　……もしかしてドリさんですか？
男の声　うん、ミドリカワだけど。

ミヤハラ、ホトリの頭をさっきまで掛かっていた布で隠しながら部屋の外へ返事する。

ミヤハラ　（隠す作業をしながら）あ、三年のミヤハラです。
ミドリ　あぁ、ミヤハラ君、来とったと？
ミヤハラ　あぁ、はい。
ミドリ　ゴメン、ドアば開けてくれんね？俺、手の使えんけん。
ミヤハラ　あぁはい、ちょっと待ってくださいね。
ミドリ　早よ！

ミヤハラがドアを開けると、
ミドリカワと名乗った白衣を着た男が部屋の中へ入ってくる。
その手には大きなガラスのドーム状のケースを抱えている。

ミドリ　やぁ……

ミヤハラ　（ミドリカワが手にしている実験器具を見て）あ、
ミドリ　ん？（部屋の中をさっと見渡して）ひとり？
ミヤハラ　あぁ、そうです。
ミドリ　お、片付いとる……（部屋が）被害は少なかった……ごたるね。
ミヤハラ　ドリさん、いつからいるんですか？
ミドリ　いつからて？
ミヤハラ　ずっといたんですか？
ミドリ　あぁ……いや、前震？でここ逃げ出して以来。
ミヤハラ　（ミドリカワの持つ実験器具を指し）それ。
ミドリ　あぁ、うん。ピッチドロップ。
ミヤハラ　あぁ、はい。
ミドリ　その……前震、ってヤツん時に、これ持って逃げたつたい。何ば考えとったとやろね。
ミヤハラ　……。

ミヤハラ、隠したホトリのことが気になっている様子。
ミドリカワは構わず話し続けつつ、
持ってきた実験器具を元あった所であろう場所へ置く。

ミドリ　俺、前震の時、まだ一人でここに残っとったけんたい、ガーって揺れて、
たぶんそん時、その辺のいろいろが倒れたり落ちたりしたと思うばってん、
とりあえず、自分のパソコンばバッグに入れて、
あと、なんでかコレ（実験器具）ば持って出たつたいね。
ここは高台だけん、俺、家は近くだけん良かったばってん、
ミヤハラ　……。
ミドリ　逆にみんな学生がこっちに歩いて来よったもんね、たぶん大学に避難するとが

良かって思たとだろね……
ちょうど頭の上ば飛行機の飛びよった。空港の方にさ……あれ着陸できたとよね？
一昨日から熊本空港発着は全便欠航ってニュースでは言いよったもんね……
ん？

ミドリカワ、漂ってきたコーヒーの香りに鼻を鳴らす。

ミドリ　……コーヒー？
ミヤハラ　はい。
ミドリ　え、勝手に？
ミヤハラ　いや、勝手にではないです。いや、勝手にです。
ミドリ　え、どっち。
ミヤハラ　すいません。
ミドリ　ウソウソ、良かろ、こぎゃん時だけん。
ミヤハラ　ドリさん、水とか大丈夫なんですか？
ミドリ　あぁ、水ね。アパートのタンクがあったけん、最初はまだ出よったけん。
風呂に溜めてある。トイレとか。
ミヤハラ　トイレが大変ですね。
ミドリ　結構トイレって水使うね。
ミヤハラ　（コーヒー）飲みますか？
ミドリ　うん……もらっていいの？
ミヤハラ　はい、もうすぐ出来ると思いますけど。
ミドリ　あぁ、うん。
ミヤハラ　ドリさん、地震以来人と会うの、俺が初めてですか？
ミドリ　何で？

ミヤハラ　ドリさん、結構喋るなぁと思って。
ミドリ　あぁ……あぁ、そうか、そぎゃんね。
ミヤハラ　ドリさんっぽくないなと思って。
ミドリ　あ、そう。
ミヤハラ　えぇ。
ミドリ　そうか。
ミヤハラ　はい……。
ミドリ　……そぎゃんね。

ミヤハラ、出来たコーヒーをカップに注ぐ。

ミドリ　みんな無事とだろか。
ミヤハラ　みんな？
ミドリ　学生のみんな。
ミヤハラ　あぁ、
ミドリ　連絡取れた？
ミヤハラ　あぁ……同級生はほとんど……ドリさんの方は？

ミヤハラ、ミドリカワにカップを手渡す。

ミドリ　俺、みんなの連絡先知らんもん。
ミヤハラ　あれ、そうなんすか。
ミドリ　俺から連絡すること無かけんね。
ミヤハラ　はぁ。

ミドリカワ、コーヒーを一口飲む。

ミドリ　はぁぁ。旨い。俺がここに来ることば予想しとったとだろ。
ミヤハラ　ハハ……
ミドリ　心配はしとるとよ。でも連絡のしようが無かけん。他県から来とるとばっかりやろ、
今、君に会うたけん、情報聞けるかなと思たけど……
ミヤハラ　四年の先輩達はみんな連絡付きましたよ。
ミドリ　おうおう、そうか。
ミヤハラ　三年も、一応、全員、ライングループで。
ミドリ　無事やったか。
ミヤハラ　先生は……
ミドリ　教授は十四日の夕方には京都から戻って来とらしたけん、
最初に揺れた時はもう家に居たとは仰っとったね。
ミヤハラ　会いました？
ミドリ　いやまだ。えーっとね、一昨日の午前中に電話があって、
しばらくここ……研究室、閉まる、っていうか立入禁止になるっていう連絡が……
（しかしミヤハラが研究室に居るので）アレ？
ミヤハラ　あ、やっぱり。
ミドリ　やっぱり？
ミヤハラ　そうですよね。
ミドリ　おいー。え、入口、なんか貼ってあったやろ？
ミヤハラ　いやぁ、どうでしたっけ……
ミドリ　まぁ、俺も恐る恐る入ってきたんだけどさ、

ミドリカワ、持ってきた実験器具を指差して、

ミドリ　アレ、返さにゃならんけん。
ミヤハラ　でもドリさんの家に保管しておいてもよかったんじゃ……
ミドリ　いやぁ、ウチのアパートより、研究室の方がよかよ。
　ニュースば見よるとね。
ミヤハラ　あぁ……。
ミドリ　こっちの方が、安心ばい。

ミドリカワ、思い出したように吹き出して、

ミドリ　本当、何でアレ持ち出したんだろうなぁ。
ミヤハラ　ハハ、何でですかね。やっぱり、ドリさんの中では、ピッチドロップは大切な実験なんじゃないですか？
ミドリ　うん……一瞬、死ぬことば考えたけんね。
ミヤハラ　……。
ミドリ　たまたまここに居ったけん、どうせ死ぬなら、死ぬまで何かしらの研究に関わっていたい、ち思たとだろね。
ミヤハラ　かっこいいっすね。
ミドリ　かっこよくはなかよ、本来衝撃を与えない様に見守っている実験器具ば持ち出しとるんだけん……要らんことしたったい。
ミヤハラ　ハハ。
ミドリ　十六日に二回目の本震が来たろ？考えてみりゃ、俺ん家なんかより、大学の方がアイツ（実験器具）にとっちゃ安全だよなと思ったつたい。

ミヤハラ、実験器具に顔を近づけて、

ミヤハラ　まったく変化を感じませんけどね。

ミドリ　それ、抱えてこっちに来る途中、やっぱり大学周辺の道路もところどころ亀裂の入ったりズレの生じとる箇所のあって、
ミヤハラ　校門の門柱が倒れてましたよ。
ミドリ　あぁ、見た見た。いや、あれ前震の時にはもう倒れとったつよ。
ミヤハラ　そうなんですか？
ミドリ　あぁ、そうそう。俺が逃げる時、既に倒れとった。
ミヤハラ　前震で倒れたのか。
ミドリ　同じ道路沿いばってん、西門は大丈夫やったろうが。西門な新しかけんね。
ミヤハラ　構造の問題ですかね？
ミドリ　落ち着いたら、そぎゃんとも調べにゃんとだろね。
ミヤハラ　はぁ。
ミドリ　落ち着くとだろか。
ミヤハラ　落ち着く、ってどういうことなんでしょうね。
ミドリ　……あ、大学の体育館辺りが避難所になってるとは知っとんね？
ミヤハラ　あ、はい。
ミドリ　さっき近くば通ったら美味そうな匂いのしよったぞ。炊き出しのあるって。
ミヤハラ　炊き出し……。

ミヤハラ、自分のお腹をさする。

ミヤハラ　腹……うーん。
ミドリ　食える時に食っておいた方がいいよ。一緒にもらいに行こうか。
ミヤハラ　あ、はい……
ミドリ　アパートのガスの止まっとるけん、暖かもんば食べたかつたい。

ミヤハラ、隠されているホトリの方を見ていたが、

ミヤハラ　いや……僕、大丈夫です。
ミドリ　　え、食べとった方が良かて。
ミヤハラ　そうなんですけど。
ミドリ　　何かあると？
ミヤハラ　えーっと……大丈夫です。ここに来る前に家で食べてきたんで。
ミドリ　　いやいや。
ミヤハラ　本当に大丈夫です。
ミドリ　　そう……じゃあ俺、行くけど……
ミヤハラ　あ、はい。
ミドリ　　しばらく居っと？
ミヤハラ　あー、そうですね。
ミドリ　　誰か待っとると？
ミヤハラ　全然。
ミドリ　　誰も来んばい。
ミヤハラ　そうですよね。
ミドリ　　立ち入り禁止。
ミヤハラ　誰も居るわけないのに。
ミドリ　　ん？誰かば探しに来たとね？
ミヤハラ　あぁ、いえ。そういうわけじゃ。
ミドリ　　建物が安全かどうか、調査の終わるまでは学生は入られんってことだろ。
　　校舎の方が安心感はあるばってんね……
　　あ、教授は京都から戻って翌日から、家屋の調査に借り出されとるらしい。
ミヤハラ　あの、ニュースでやってるヤツですかね。

ミドリ　応急危険度判定って言うらしい。
ミヤハラ へぇ。
ミドリ　俺もそれ、手伝うことになっとるとたい。
ミヤハラ そうなんですか？
ミドリ　うん。明日、教授の代わりに。
ミヤハラ え、
ミドリ　もう見た目でバンバン紙を玄関に貼り付けていく作業。
　詳しいやり方は明日、説明のあるらしか。
ミヤハラ 大変ですね。
ミドリ　でも、実際に地震の影響ば受けた建物ば見らるってことだけんね。勉強だと思って行くわ。
ミヤハラ 頑張ってください。
ミドリ　おう。んじゃ。
ミヤハラ ありがとうございました。
ミドリ　うん。え？
ミヤハラ ん？
ミドリ　俺、何かしたっけ？
ミヤハラ え？
ミドリ　俺、礼を言われるようなことしたかな？
ミヤハラ アハ、いやぁなんかそんな気持ちだったんですかね？
ミドリ　ハハ、わかるけど。
ミヤハラ アハハ。
ミドリ　大きく揺れたら何も持たずにとりあえず逃げろよ。
ミヤハラ はい、そうします。
ミドリ　おつかれ。

ミドリカワ、部屋を後にする。

ミヤハラ　お疲れさまです。

ミヤハラ、ミドリカワを見送って、

ミヤハラ　ハハ……誰も居るわけないのに。
ホトリ　居るぞ！
ミヤハラ　あ！

ミヤハラ、隠していたホトリを表に出す。

ホトリ　大きく揺れたら、私を持って逃げろよ。
ミヤハラ　はい……そうさせていただきます。
ホトリ　ハハ……今来たのは、ミドリカワ君だったっけ？
ミヤハラ　あぁ、そうですそうです。
ホトリ　学生の頃からたまに家に遊びに来ることもあったから。
声にも特長あるしね。すぐわかったわ。……何か持ってきたみたいだったけど。
ミヤハラ　はい、これ。

ミヤハラ、実験器具を指差す。

ホトリ　何それ？
ミヤハラ　ピッチドロップ実験です。
ホトリ　ピッチドロップ？
ミヤハラ　はい。ピッチがドロップするのを眺めるだけの実験です。

ホトリ　ピッチが。ドロップ。
ミヤハラ　はい。
ホトリ　はてさて。
ミヤハラ　ゼミに入った最初の授業で説明が、
教授、毎年説明なさるんだそうです。
ホトリ　へぇ。ピッチが？ピッチって？
ミヤハラ　ピッチ……樹脂ですね。本物のピッチドロップ実験ってのがあってですね。
ホトリ　ホンモノ？
ミヤハラ　えーっと、オーストラリアのどっかの大学でやってるんですよ。冗談みたいな実験なんですけどね。
こんな感じで、漏斗にピッチ……樹脂を入れて、
そのピッチってのは固体みたいな性質で強い力で衝撃を加えると割れちゃうんですけど、
実はとても粘性の高い液体で、ゆっくり滴り落ちるのを観察する、っていう実験なんですね。
ホトリ　あー、旦那から何度も聞いたわ、その話。
ミヤハラ　ギネスにも載ってる実験です。最も長い期間に渡る実験だったかな。
ホトリ　旦那も、真似して自分でもやってるって。
ミヤハラ　はい。それがこれです。あ、でもここに入ってるのはアスファルトですね。
ホトリ　アスファルトって、道路の？
ミヤハラ　はい。道路はこのアスファルトに骨材、石とか砂とかを混ぜて舗装してるわけです。
ホトリ　アスファルトは液体ってこと？
ミヤハラ　うーん、どうなんですかね？液体の性質を持ってるっていうことなのかな。
すいません、詳しくはわからないです。
これをゼミに入った時に、毎年学生に見せてるそうです。
ホトリ　道路って液体なんだ。
ミヤハラ　まぁ、そう言ってもいいのかもしれませんね。地面は時間とともに多少上下するから、
それに対応できる素材ってことなのかな。

ホトリ　でも、強い衝撃で割れちゃうんだ。
ミヤハラ　そう……ですね。
ホトリ　割れてたもんね、道路。
ミヤハラ　あちこち割れてましたね。……僕、
ホトリ　ん？
ミヤハラ　坂本ゼミに入ったの、４月からなんですよ。
ホトリ　え、そうなの？え、でも、
ミヤハラ　３年からゼミに入るんで。あ、でも1年の頃から教授の授業も受けてたし、ここにもよく来てましたから。あぁ、ドリさんとかも、だから知ってるっていうか。
ホトリ　あぁ、いや、なんか入ったばっかりの感じじゃなかったからさぁ。
ミヤハラ　んで、この間、聞いたばっかりの話だからこの実験の話、覚えてたんです。地震で結構道路やられてるじゃないですか、市内でも。
ホトリ　うん。
ミヤハラ　田んぼの舗装されたあぜ道の真ん中に穴が開いてたりしてるんです。あちこち。橋が、橋と陸のつなぎ目がこんなに段差があったりとか。
ホトリ　すごくガタガタしてたよね。私、ここに来る途中で車に酔ったもん。
ミヤハラ　僕、原付でさっき益城の方まで走ってきたんですけど、
ホトリ　……。
ミヤハラ　穴が開いた道路の上を、車がずんずん行っちゃうんですよ。穴の前で立ち往生してる車があっても、後ろからクラクション鳴らされて、そんで、えいって行っちゃうんです。それ見て、怖えーって。
ホトリ　液体だと言われたら、確かに怖いよね。
ミヤハラ　穴が開いてるんですからね。その下何もないんじゃね？って。
ホトリ　そうだよね。
ミヤハラ　原付は道路の端っこ走るじゃないですか。路側帯、かなりガッタガタなんですよ。

側溝のフタ、たまに落ちてるし。命懸けですよ。
ホトリ　え、益城に何しに行ったの？
ミヤハラ　……え？
ホトリ　お家、あっちの方？
ミヤハラ　いえ、市内です。え、いや何しにってこともないんですけど。
ホトリ　ん？見に行ったの？
ミヤハラ　見に行ったっていうんでしょうか。んー……
ホトリ　今日旦那は、さっきミドリカワ君が話してた、建物の判定に行ってるのよ。
ミヤハラ　あぁ……はい。
ホトリ　私、こんなんなってるのにさ。
ミヤハラ　……そうですね。
ホトリ　ヒドくない？
ミヤハラ　あぁ……
ホトリ　さっきのミドリカワ君と同じこと言って出て行ったわ。
「勉強だと思って行ってくるよ」って。
ミヤハラ　うーん、
ホトリ　おいおい、目の前に今一番面白い人間が居るぞ、っての。あ、
ミヤハラ　え……どうしました？
ホトリ　その、机の上にさ、なんかノートが重ねてない？
ミヤハラ　どんなノートですか？
ホトリ　何のノートかは私も知らないんだけど、
ミヤハラ　おぉ、得体の知れないものを探せと仰る……
（が、机の上を少し探してすぐに何か見つけて）あ。
ホトリ　何かあった？
ミヤハラ　（手に取り）「２０１６年４月１６日からの日記」って表紙に書いてあります。

ホトリ　たぶんそれそれ。昨晩、そこに座って書いてたのはそれか。
ミヤハラ　めっちゃわかりやすいタイトルですね。
ホトリ　それ、私の観察日記なんじゃないかと思うんだよね。
ミヤハラ　そうなんですか？
ホトリ　何書いてるのって聞いても、「仕事の」って言うだけで見せてもくれないんだけど、私の勘ではそれ、ホトリの頭観察日記だと思うのよ。
ミヤハラ　はい。
ホトリ　中、見てみようか。
ミヤハラ　いや、（ノートを机に戻して）それは……
ホトリ　読んでよ。
ミヤハラ　いくら奥様の命令とは言え、人様の日記を読むのはちょっと、
ホトリ　私がいいって言ってるんだから。それに書いてある本人だから。
ミヤハラ　でも書いたのは教授ですし。
ホトリ　お願い、ね、お願い！
ミヤハラ　うーん、
ホトリ　絶対、私のことを観察してるはずなの。そういう人だから。……ね、お願い！

ミヤハラ、机の上のノートを見つめて、悩んでいる。
ホトリに目をやると、ホトリは目で強烈に訴えている。
観念してミヤハラ、ゆっくりとノートを手に取る。が、

ホトリ　あ！うーん、やっぱり、ダメか。
ミヤハラ　はい？
ホトリ　やっぱり夫婦といえども、相手の日記を読むのはマナー違反だね。考え直した。ウソ！なし！
ミヤハラ　……そうですよ。それがいいです。

ミヤハラ、ホッとした表情。

ホトリ　あのさ、そっちの電気が来てないのは、そこのブレーカーを落としてあるんだと思うのよ。
　こっちは、私の電話があるから、ここの分だけ活かしてあるのかな。たぶん。
ミヤハラ　あぁ、なるほど。
ホトリ　私の推理。
ミヤハラ　避難するときはブレーカーを切れって今どこでも言ってますもんね。
ホトリ　そうなんだ。火事になるかもしれないからね。
ミヤハラ　はい。
ホトリ　昨夜はそっち側で旦那がコーヒー淹れてたから、夜は電気は生きてたんだと思うけど、
　旦那が出掛ける時にそこのブレーカーを落として出たんだね。
ミヤハラ　なるほど。
ホトリ　私、頭だけになったから、人一倍考えることにしたの。
　ミヤハラくんがこの部屋に入ってくる前から、いろんなことを考えていたんだけど、
　そして、推理小説とかもっと読んでおけばよかったなぁとかも……
ミヤハラ　推理小説。
ホトリ　頭を使う仕事ってなんだろうなと思って。推理小説に出てくるようなさ。
ミヤハラ　探偵ですか。
ホトリ　そこで、私はミヤハラくんのことを少し推理してみようと思うのだけど。
ミヤハラ　……あ、だから、やっぱり探偵みたいな喋り方だったんじゃないですか、さっきまでの。
ホトリ　そうそう、完全にそっちにひっぱられてました。
ミヤハラ　え、僕の、何を推理するんですか？
ホトリ　例えばね……何かを、いや、誰かを探しているんじゃないのかい？
ミヤハラ　……どうしてですか？

ホトリ　これまでの話を総合するとだね、目的もなく震源地までバイクで行った。
益城に行ったそのままの足でここにやってきた。家に帰ることなく。
リュックに水が入ってたのも、それは誰かに届けようとして持って出たもので、
ミヤハラ　……いえ、これは自分用で。
ホトリ　一瞬言い淀んだねぇ。
ミヤハラ　それ……推理って言うんですかね？
ホトリ　私も探偵1日目なんだから多目に見て。ゲーム。
ミヤハラ　ゲーム。はい。
ホトリ　女の子、だね。
ミヤハラ　え？
ホトリ　ほら、白状しなさい。
ミヤハラ　いやぁ、
ホトリ　だってミヤハラくん、実家こっちじゃないでしょ？
ミヤハラ　はい。
ホトリ　熊本弁が全然出ないもんね。
ミヤハラ　うーん、そうですっけ？みんなこんな感じの喋り方だと思いますけど。
ホトリ　実家じゃないのに……ご両親も帰ってこいって仰るでしょう。避難しておいでって。
ミヤハラ　はい。連絡はありました。
ホトリ　ほら、正解！つまり、実家に帰った方がいいのに、それよりも大切な、気にかかることがある。
その歳で気になること、それは……なるほど……
ミヤハラ　何ですか？
ホトリ　ねぇ、ここまで当たってる？
ミヤハラ　あの……推理って言うか、勘ですよね？
ホトリ　好きなコ？
ミヤハラ　はい？

ホトリ　え、何ていうコ？
ミヤハラ 名前はいいですよ。
ホトリ　ダメダメ、
ミヤハラ いやぁ……
ホトリ　言いなさい！
ミヤハラ ……ヤマエさん。
ホトリ　ヤマエ、なにちゃん？
ミヤハラ ヤマエナナさん……
ホトリ　ナナちゃん。ナナちゃんは無事なの？
ミヤハラ 無事は確認出来てます。
ホトリ　連絡した？
ミヤハラ 連絡……グループラインで。
ホトリ　じゃなくて、直接よ。
ミヤハラ いや、それは迷惑になるから。
ホトリ　何が。何でよ。え、全然してないの？
ミヤハラ え？
ホトリ　メールは？してないの？
ミヤハラ ホトリさん、なんですか、お母さんですか。
ホトリ　照れるな。はい、メールしたの？してないの！
ミヤハラ してないです。
ホトリ　「何か困ったらすぐ連絡して」くらい出しなさいよ！
ミヤハラ いやいやいやいや……
ホトリ　え！なにこの状況で悠長なこと言ってるの！
ミヤハラ 本当に、迷惑になりますから。
ホトリ　今のこの時に、迷惑なんて思う人いる？

ミヤハラ　僕がそんなことしても、迷惑ですから。そんな関係でもないし。
ホトリ　複雑な事情でもあるの？
ミヤハラ　複雑っていうか……
ホトリ　あぁ、ナナちゃんには彼氏が居るのか。
ミヤハラ　いや、居ないと思いますけど。
ホトリ　なんなの！信じられない！
ミヤハラ　そうですか？
ホトリ　違う、違うよ、心配するっていう気持ちをメールで届けるだけじゃない。
ミヤハラ　……そうですけど。でも、なんか緊張するじゃないですか。
ホトリ　ふられるのが怖いんだよ。そうでしょ？
ミヤハラ　そりゃぁ、怖いですよ。
ホトリ　「迷惑になるんじゃないか」なんて考えることが、アレだね。逃げだね。
ミヤハラ　そうかもしれませんけど。
ホトリ　少しは否定しなさいよ！
ミヤハラ　うーん、否定出来ない部分もありますし。
ホトリ　がぁ！聞き分けがいい！
ミヤハラ　すいません。
ホトリ　よすぎる！よすぎてよくない！
ミヤハラ　……はぁ。
ホトリ　まぁいいよ。……んで、益城まで原付で走って、なにか収穫あったの？
ミヤハラ　あの、でも僕、彼女の家、知らないんですよ。
ホトリ　ナナちゃん家？
ミヤハラ　はい。知らないけど、居ても立ってもいられなくなって。
ホトリ　あー、それはいいよぉ！
ミヤハラ　あれ、そうですか。

ホトリ　いいよ、恋してる感じ、あるよ！
ミヤハラ　ホトリさん、他人事だと思って面白がってるでしょ？
ホトリ　面白がる権利はあるでしょ！
ミヤハラ　え、ありますか？
ホトリ　人の恋愛話が一番面白いんじゃない。
ミヤハラ　僕の気持ちはどうでもいいんですかね。
ホトリ　っていうか……あぁ、じゃあこうしよう、真剣に応援するから、聞かせてくださいよ。
ミヤハラ　これまでは真剣じゃなかったんですか。
ホトリ　お願いお願い！この通り！
ミヤハラ　どの通りですか。
ホトリ　お……
ミヤハラ　あ……
ホトリ　いいよ、そうやって突っ込んでもらうの、いいよ。
ミヤハラ　すいません。
ホトリ　謝らなくていいから、どんどん、これからミヤハラくん、ツッコミ係ね。
ミヤハラ　うわぁ。
ホトリ　私、身体を張ってボケるから。
ミヤハラ　うわぁ。
ホトリ　でも、その張る身体がないんですけど！
ミヤハラ　……荷が重いなぁ。
ホトリ　そう言わずに。さ。
ミヤハラ　頑張りますけど……

ミヤハラ、少し考えていたが、

ミヤハラ　うーん、自分は別の世界から来た人間のようだな、って思いました。
ホトリ　うん？
ミヤハラ　居ても立ってもいられなくなって、益城まで原付で走って、
あてもなく避難所とか探しまわって、彼女の友達とかに聞けば、どこに住んでるのか、家も教えてもらえるのかもしれないけど……そんな関係じゃないし、ただの同級生だし、
ホトリ　でもさ……緊急事態なんだからさ、
ミヤハラ　うん、そうなんです。緊急事態っていうのが、何か所か避難所まわってて実感、と言うと
おこがましいっていうか、失礼っていうか……
とにかく急に「俺、なにしてるんだろうな」って思えてきて、
ホトリ　うん？
ミヤハラ　避難所で、家に戻れない人たちが教室とか廊下とかで座って、寝てる人も居て……
生活にみんな困ってるっていうのに。
ホトリ　うーん、あぁ、なるほどね。
ミヤハラ　自分は何をしてるんだろうって、何て言うんだろ、宇宙人みたいだなって。
ホトリ　わかる。わかるよ。
ミヤハラ　ただ散歩してるのと変わらないわけですよ。自分。
ホトリ　それはいいじゃない。無理してわざわざ不幸な気持ちになるなんてナンセンスだよ。
ミヤハラ　不幸な……気持ち……
ホトリ　若い頃はセンシティブだからね、そういう気持ちわかるところあるよ。
人が苦しんでいるのを目の当たりにして悩むことは、うーん、正しいよ。
そんで、何か役に立とうと思ってボランティアとかするんだよ。正常正常。
ミヤハラ　そういうもんですか？
ホトリ　でも、私ゃ、そんな君に言いたいことがある。
ミヤハラ　……はい。
ホトリ　……まぁでも、そうだなぁ、ミヤハラくんは何の因果かここに来て、

私を、助けてくれているわけだから。
ミヤハラ　僕……何か助けになってますか？
ホトリ　晴れて私のボケに対するツッコミ係となり。
ミヤハラ　それは、助けになりますか？
ホトリ　正直、最初誰かがこの部屋に入ってきた時にさ、私、下向いて苦しかったんだけどさ、声を上げるべきか相当悩んだの。
ミヤハラ　あぁ、はい。
ホトリ　ミヤハラくんで良かったよ。ホント。
ミヤハラ　……。
ホトリ　まぁ、乗りかかった船だ。ミヤハラくんの恋愛を私は応援します！
ミヤハラ　それはいいです！
ホトリ　ミヤハラくんも乗りかかった船だよ。私と出会ったんだから。
ミヤハラ　はい。
ホトリ　助けてよ。
ミヤハラ　……はい。
ホトリ　でもね、私、長生きしたら、今の話、本に書きたいわ。ミヤハラくんが言ったこと。やっぱり、探偵じゃなくて作家かな。いろんな文章、書いて書いて書きまくる！
ミヤハラ　……。
ホトリ　万年筆で！
ミヤハラ　ど……！（何か言いたいが、出ない）
ホトリ　！（それに気付く）お！
ミヤハラ　あぁ……（機を逃して）ごめんなさい。
ホトリ　ううん、ツッコもうとしてくれたよね？
ミヤハラ　はい。
ホトリ　ありがとう。

ミヤハラ　はい。
ホトリ　自分は別の世界から来たみたいだって、さっき言ったよね。
ミヤハラ　はい。
ホトリ　もし、自分の良心が傷むんだったら、傷ついた人をみて、助かった自分の気持ちがモヤモヤするんだったら、私の、この姿を見てよ。
ミヤハラ　……。
ホトリ　私こそ、宇宙人。別世界の人。
ミヤハラ　……。
ホトリ　だって、恋愛だって、生活じゃん。どんな状況だって、それぞれの生活がある。
ミヤハラ　……気が引けますね、どうしても。
ホトリ　私も、私の頭だけのこの人生を、精一杯生きるって決めたんだ。
疎外感って言うのかな、感じたって、自分らしく居ようよ。
私自身のためにも、勝手にミヤハラくんのその恋愛を応援するよ。
ミヤハラ　本当に、それは遠慮しますから……

言葉とは裏腹に、ミヤハラの表情は少し明るい。

ホトリ　もうすぐ旦那も帰ってくるかな。
ミヤハラ　ここにですか？じゃあ僕、教授がここに帰っていらっしゃるまで、居ますよ。
ホトリ　そう。えーっとね、とても助かる。
ミヤハラ　また余震でひっくり返るかもしれませんから。
ホトリ　子どもが……息子が居たらこんな感じだったのかな。
ミヤハラ　えぇ？あぁそうか、ホトリさん、お母さんみたいですもんね。
ホトリ　えぇ？
ミヤハラ　お姉さんみたいですもんね。

ホトリ　ここに居るときは息子みたいにしててていいから。
ミヤハラ　あれ？……お子さんいないんですっけ？
ホトリ　そうなのよ。忙しいからあの人。
私も結構長く働いてたからね。

ホトリ、黙り込む。
ミヤハラ、静かになったホトリを見て、

ミヤハラ　ホトリさん？
ホトリ　……あぁ、ごめんごめん、ちょっと眠たくなっちゃった。
ミヤハラ　え……

ミヤハラ、ホトリの容態を心配し、立ち上がるが、

ホトリ　あぁ、大丈夫大丈夫、本当に眠いだけ。今朝もちょっとしか眠れなかったのよ。
あぁ……でも「眠る」ことは出来るみたいなのよ。普通に。私。大丈夫。
ミヤハラ　そう……ですか……
ホトリ　西日が眩しいな……
ミヤハラ　目隠ししましょうか。
ホトリ　うん。

ミヤハラ、ホトリに布を掛け、目隠しをする。

ホトリ　あ、結局コーヒー、飲まなかった。
ミヤハラ　そうですね。
ホトリ　でも、今は飲みたくないから、明日の楽しみにとっておこうかな。

ミヤハラ 教授に、僕がここにいること、連絡しておきます。
ホトリ　そうだね、ごめん。

ミヤハラ、スマートフォンを取り出し、しばらく弄っている。
メールを送信し終えると、ホトリが入っている棚の箱を一度見やる。

ミヤハラ ホトリさん？

ホトリから返答がないのを確認した後、椅子に腰掛け、教授の日記を読み始める。

ミヤハラ 「２０１６年４月１６日
今日から、私と妻のために、この日記を始める。
正確には、今これは１７日の夜に書いている。
昨夜は家を飛び出し、近所の東小学校に避難。２階、５年１組。

いつの間にか、ミヤハラの声は教授の声に移り変わっている。日が暮れて行く。

夜中、何度も余震があり、そのたびに避難者が小さな悲鳴のような声をあげる。
うとうとしていても、揺れる度に目が覚める。
地響きが聞こえると咄嗟に、ホトリのいるバッグに覆い被さるような形になる。
床が崩れる、ではなく、天井が落ちてくる恐怖があるのだ。
高層建築なら、床が落ちるのと天井が落ちるのはほぼ同義だというのに。
辺りを見渡すと、頭を守る様にうずくまるか、上を見上げるか、が多くを占めているようだ。
さなか、ふと自分が勃起していることに気付く。
生命の危機を感じたのか？
例えば、避難所における性犯罪への関連性はあるだろうか。またこうした実感も、避難所となる公共

施設の建設に関係していくことなのか？」

日記を読む教授の声も、だんだんと夜の闇に飲み込まれて聞こえなくなる。

二〇一六年四月十九日

翌日。午前中。
ミヤハラがホトリの傍らでコーヒーを飲んでいる。

ミヤハラ　今朝、調べていたんですよ。頭だけになって生きていた生物っているのかな、って。
ホトリ　うん……どうだった？
ミヤハラ　逆はあるみたいなんですよね。頭が無くても生きていたニワトリ。
ホトリ　え、
ミヤハラ　けっこう昔の話なんですけどね、本当に存在したらしいです。
　首なし鶏マイクって名前で見せ物になっていたそうです。
ホトリ　どうやって生きてるの。
ミヤハラ　いやでも、身体が機能しさえすれば、あとは水とえさを首からあげてたらしいから、
　大丈夫なんじゃないですか？
ホトリ　それって生きてるの？
ミヤハラ　うん、
ホトリ　生きてるっていうのかな？
ミヤハラ　生きてるんじゃないですか？
ホトリ　ミヤハラくんにちょっと聞いてみたいんだけどさ。
ミヤハラ　はい。
ホトリ　頭だけで生きてるのと、身体だけで生きてるの、どっちが気持ち悪い？
ミヤハラ　どっちも、ですね。
ホトリ　オブラートに包もうか。
ミヤハラ　あ、いや、あのそういう意味じゃなくて。

人間はっていうか動物は、やっぱり誰だって思うんじゃないですか、って話です。
ホトリ　私もそのつもりで聞いてるんだけど。
ミヤハラ　見た目でなんか違う、っていう違和感が、なんと言うか、ショックっていうか、
ホトリ　でも、君はそんなにびっくりしなかったじゃない。
ミヤハラ　え、しましたよ。
ホトリ　したっけ？
ミヤハラ　しましたよ。誰でもびっくりしますよ。
ホトリ　誰でも。
ミヤハラ　するでしょう。
ホトリ　するよね？するはずだよね？

ミヤハラ、コーヒーを一口。

ホトリ　旦那もね、最初、驚いた表情を一瞬したんだけどね。
その後、すぐ胴体の脈を取ったんだよ。
あ、私がここに来るまでの話をしてなかったよね。
ミヤハラ　はい。
ホトリ　あ、少々グロい話になるけど。
ミヤハラ　程々でお願いします。
ホトリ　揺れの衝撃でドーンと家が崩れたんじゃなくて、
私がキッチンから旦那の部屋に「逃げよう」って言いに行った時に
崩れたみたいなのね。
旦那も部屋で転んでて、私、部屋の入口の、ドアの所にこうやって、
……「こうやって」が出来ないんだけど、
ミヤハラ　……。

ホトリ　できないんだけど……こうやって……が……
ミヤハラ 必要ですか？
ホトリ　必要！

ミヤハラ、渋々立ち上がる。
ホトリの指示で、状況を体現する。

ホトリ　開いたドアの縁に右手を掛けて、
ミヤハラ こうですか？
ホトリ　うん、左手はドアノブ握って、部屋の中に右足を踏み入れて……
ミヤハラ 右足、
ホトリ　部屋を覗き込む……
ミヤハラ 覗き込む……
ホトリ　はい、その状態で上を見る、
ミヤハラ 上を見る……
ホトリ　頭上からミシミシ音がしてる、
ミヤハラ ミシミシ……
ホトリ　見えてる天井と壁を結ぶ真っ直ぐのはずの線が、
ミヤハラ あぁ、はい、
ホトリ　グニャっと歪む……
ミヤハラ あぁイヤイヤイヤなんか怖い怖い怖い……
ホトリ　たぶん、たぶんなんだけど、ドアで、
ミヤハラ 怖い怖い怖い！そこ詳しくなくていいです。
ホトリ　そこは端折るけど、旦那が気を失ってて、私が旦那にずっと声掛けてて。
「逃げて逃げて！」って。んで、旦那が目を覚まして、私がほら、喋ってるから、

頭しかないのに喋ってるから、一瞬眼を丸くしたんだけど、
その後すぐに私の身体を、倒れてる柱とかから掘り出して、手をね、引っ張りだして、
脈を計ったのよね……

ミヤハラ　……え。
ホトリ　そういうところあるのよ、あの人。
ミヤハラ　教授はそういうところ冷静そうですね。
ホトリ　そして、私の頭をコンビニ袋みたいなのに入れて、さらにリュックに詰めて、
近所の小学校にとりあえず避難したの。
ミヤハラ　救急車呼ばなかったんですか？
ホトリ　あ、うん……まぁ、それはね、まぁ、あーその話も実はいろいろあるんだけど、
ま、置いといて、
ミヤハラ　でもそうか、救急車呼んでないってことは、教授もびっくりってか、
動転してたってことですね。
ホトリ　え、そうなのかなぁ。

ふと、ドアをノックする音。二人に緊張が走る。
続いて一人の女性が部屋へと入ってくる。
黒尽くめの格好でサングラスとマスクという奇妙な出で立ち。

ナギサ　……いた。
ホトリ　……ナギサ……
ナギサ　もう、姉ちゃん。
ホトリ　え、なんで。
ナギサ　お義兄さんから聞いた、ってか頼まれた……

と言ってナギサ、ホトリの頭に駆け寄り、まじまじと眺める。

ホッとしたのか、気を失いそうになって崩れ落ちる。
ミヤハラが慌てて抱きかかえる。

ホトリ　え……なんでナギサが？
ミヤハラ　昨日言ってた妹さん、ですよね？
ホトリ　う、うん……
ミヤハラ　（ナギサに）大丈夫ですか？
ナギサ　あぁ、すいません……
ミヤハラ　座りますか？
ナギサ　あぁすいません……

ミヤハラ、ナギサをソファーに座らせる。

ミヤハラ　あの、僕、
ナギサ　サカモトから聞いてます。昨日から姉の面倒をみてくださってるんでしょう？
ミヤハラ　いや、そんな大層な、
ナギサ　ありがとうございました。本当に。
ホトリ　知ってたのか……。ナギサ、
ナギサ　なに？
ホトリ　（格好が）黒いね。
ナギサ　もう、お姉ちゃん、なんですぐ知らせてくれないのよ。
ホトリ　うん……
ナギサ　お姉ちゃんに何かあったら、私しかいろいろしてあげられる人いないんだから。
ホトリ　いろいろですか。
ナギサ　（ミヤハラに）ウチは早くに両親を亡くしてまして、
まぁ、義兄も忙しいみたいだし、やっぱりね、私がその、後のこと、葬儀とか、

ミヤハラ　葬儀？
ナギサ　はい。
ホトリ　私の。
ミヤハラ　え、葬儀？
ホトリ　そう。
ミヤハラ　葬儀？お葬式？
ホトリ　（全てを把握した様子で）あぁ……
（ミヤハラに）昨日の夜、旦那と話し合ったのよ。
それですぐ、ナギサに連絡が行ったってことね。はいはい、了解。
ナギサ　私、福岡に居るんですけどね、夜中にサカモトから電話がありまして。
姉の肉親ということになると、私しかいませんので。
ミヤハラ　え、ちょ、ちょっと、
ナギサ　はい？
ミヤハラ　ホトリさん、の、葬儀があるんですか？
ナギサ　そうです。
ホトリ　昨日の夜、話し合ったの。でも、
ナギサ　お義兄さんから相談されたよ。
ホトリ　私、ナギサには言うなって言ってたのに。
ミヤハラ　え？生きてるのに？
ホトリ　そういうわけにはいかないでしょ。身体は……あの家にあったんだから。
ナギサ　生命保険とかの手続きもあるし、大っぴらにお葬式をあげるわけにもいかないし。
何を持ってくればいいのかよくわかんなかったから、とにかく、
お水とか近所で買い占めて、明け方っていうか夜中に福岡を出て、
ホトリ　道路、混んでるんだってね。
ナギサ　そう！３号線は全然進まないし、道もガッタガタで。

逆……北上する車の方が多かったけど。

ホトリ　市内はお店が開いてないから、車出せる人はみんな、開いてる店を探してるんだって。

ナギサ　あ、姉ちゃん、後で髪洗ってあげるから。水のいらないヤツ買ってきたから。
髪留めとかいっぱい持ってきたから（と言って、次々と出す）。
あと、何が食べられるのかわかんなかったから、ウィダーインゼリーとかなんか
いろいろ買ってきたから。

ナギサ、次々と持ってきた物をテーブルに出す。すぐにテーブルはいっぱいになる。

ナギサ　……わけがわかんないけど、生きててよかったよ……

ナギサ、流れる涙を拭いながら、次々に物を広げていく。
一杯のテーブルからは次々と押し出された物がこぼれ落ちる。

ホトリ　……。

ミヤハラ　……。

その様子を眺めていたミヤハラ、どうしていいのか困ってホトリを見る。
目が合うと、ホトリは少し苦笑い。
ミヤハラ、立ち上がってコーヒーを注ぐ。

ホトリ　ナギサ、ありがとね。

ナギサ　生きてるっていうのかもう、わかんないけど……

ミヤハラ、ナギサの前にコーヒーの入ったカップを置く。
ナギサは少し驚いて、

ナギサ　あ、ありがとうございます。
ミヤハラ　どうぞ。
ホトリ　コーヒー。
ミヤハラ　はい。
ホトリ　いいじゃんいいじゃん。

ナギサ、コーヒーを一口。
それを見届けてホトリ、

ホトリ　夜明け前、旦那の大きなリュックに私入れられて、
背中は見えないから危ないって、旦那が胸の方にリュック掛けて、
家に行ったよ。
ナギサ　……うん。
ホトリ　旦那が「ホトリは見るな」って言うから、私、自分の身体がどうなってたか見てはないんだけどね。
んで、救急車呼んで、んで、私は旦那の背中の方に移動して……
ナギサ　……。
ホトリ　リュックの中に居るんだけど、少しほっぺたとかおでこが寒くって。
ナギサ　うん、まだまだ冷えるから。
ホトリ　旦那が救急隊員さんに、「頭を探したけど、見つかりません」って告げて、
隊員さんは、私の身体を瓦礫から一応出してくれたけど、救急車には乗せてくれなかったよ。
次の所に行かなきゃならないしで忙しそうだったし。
救急隊員が「残念ですが」っていうのを私、旦那の背中で聞いた。
こんなことって、自分が死んだって聞くことがあるんだなぁ、って思いながら聞いた。
救急隊員は死亡判定しないって聞いたことあったけどなぁ。まぁでもそりゃそうか。
旦那が毛布とブルーシートで私の身体をくるんで、その後私もリュックから顔出して、

崩れた家を眺めて。あ、その時にまた揺れて、旦那が転んで……
でもちゃんと私を胸に抱えて守ってくれて……
ま、つまり！私はもう、法律的には生きてないってことだね！

ナギサは俯いてホトリの話を聞いている。
ミヤハラ、しばらく黙ってホトリの話を聞いていたが、急に立ち上がり、

ミヤハラ　でも、僕の目の前で、こうして生きているんだし。
ホトリ　……。
ミヤハラ　法的にはそうかもしれないけど、ここにいるんだし！
それが、なんて言うか、大事なことじゃないですか？
ホトリ　いいこと言ったぜ！ミヤハラ！その通り！
ミヤハラ　……。

ミヤハラが続いて何も言わないので、

ホトリ　続きはないんかい！
ミヤハラ　え？
ホトリ　あー！身体がなくなって初めて思ったわ！芸人さんみたいに今のところコケたかった！
ミヤハラ　あぁ、（やってみて）こういうヤツですか？
ホトリ　ハハハ、ヘタクソ、
ナギサ　そうそう、おにぎり握ってきたんだ。

ナギサ、ホトリとミヤハラのやり取りを寂しげに見ていたが、
たくさんの荷物の中から大きなタッパーを取り出して、

ナギサ　あー、さっき大学に入ったらさ、いいにおいがしてたよ。避難所の炊き出しがあってるんだね。
ミヤハラ　あぁ……もうそんな時間ですか。
ホトリ　そうか……お腹すいたもんね。
ミヤハラ　え！おなか！
ホトリ　お腹すいた……気がするね。
ナギサ　結局どうなってんの？何か食べられるの？
ホトリ　これが不思議なんだよね。食べたり飲んだりしたものが……量はちょっとしか食べられないんだけど
さ、どこに行くのか自分でもわからない。
ミヤハラ　首の下から漏れ出てくるのかなとか、
ホトリ　ね、ちょこちょこ試してるんだけど、わからないのよ。
ミヤハラ　でも、お腹すいたって言ったのは初めてですね。
ホトリ　お腹すいた気がしただけよ。あれよ、ファントムおなかよ。
ミ・ナ　ファントムおなか？
ホトリ　ファントムペインってあるじゃん。それのお腹すくバージョンよ。
ミヤハラ　ハハ、なんすかそれ。
ナギサ　……。
ホトリ　ミヤハラくん、ナギサのおにぎり食べたら？
ナギサ　あぁ……あぁ、そうだね、どうぞどうぞ。
ミヤハラ　じゃあ、ちょっと炊き出しも……もらって来ようかな。
ナギサ　豚汁だって聞いた。
ミヤハラ　そうなんです、豚汁、食べたいなって思ってたんで。
ホトリ　行って来なよ。
ミヤハラ　そうしようかな。お二人の分も一緒にもらってきますね。
ホトリ　うん。
ナギサ　あぁ、いえ、私はすぐ、斎場に行かないといけないので。

ホトリ　ゆっくりしていけばいいのに。
ナギサ　サトルさん、一人じゃ大変でしょ。あ、すいません、ミヤハラさん、
ミヤハラ　はい？
ナギサ　こんな大変な時に恐縮なんですが……ミヤハラさんに折り入ってお願いがありまして。
ミヤハラ　はい……なんでしょうか。
ナギサ　今夜、ここで姉を見ていてもらえませんでしょうか。
ミヤハラ　と言いますと？
ナギサ　先程申しました様に、今夜は姉の葬儀があります。
今、斎場でもう……準備を進めてて……
ミヤハラ　あぁ、教授が。
ナギサ　そう、ここに来る前に一度、その、斎場でサトルさん、あぁ、旦那さん……
ミヤハラ　教授が、
ナギサ　うん、今、斎場に……姉の身体と一緒に居ます。
私もこの後、行かないと。遅れてウチの旦那さんも福岡から駆けつけて、
本当に家族だけの……葬儀になると思う。
ミヤハラ　明日……ですか？
ナギサ　うん。明日……十時から。
ミヤハラ　それってあの……僕、はアレですけど、他の学生とかにも知らせていいですか？
ナギサ　それなんですよね……大学側にはもう知らせてあるんですが、
うーん、学生さん方に知らせないのもおかしいですよね。
それは……この後、サトルさんと会って相談するので、それを待っていただけますか？
ミヤハラ　わかりました。じゃあ……
ナギサ　あ、あの、私すぐに行ってしまうわけじゃないんで、炊き出し行ってください。
ミヤハラ　あぁ、はい。すいません。
ナギサ　こちらこそ、ミヤハラさんも大変なのに、お願いしてしまってすいません。

ホトリ　ミヤハラくん、いいの？
ミヤハラ もちろん大丈夫ですよ。
ホトリ　……ありがとう。
ミヤハラ ホトリさんには相談にのってもらわないといけないし。
ホトリ　いいよー。のるよー。
ミヤハラ ダッシュで行って来よ。

ミヤハラ、ナギサに軽く一礼して部屋を出て行く。
ナギサの前のテーブルには、ナギサが持ってきたいろんなものがいっぱい。

ホトリ　いろいろ持ってきてくれたんだ。
ナギサ　思いついたもの、片っ端から持ってきた。
ホトリ　うん。
ナギサ　ミヤハラさんは、かなり、その……受け入れてるんだね。
ホトリ　何を？
ナギサ　お姉ちゃん。
ホトリ　受け入れて……そうね、うーん、最初の出会いから、すぐに受け入れてた気もするけど。
ナギサ　私、徐々になれていくから。もうちょっと時間ちょうだい。
ホトリ　もちろん。
ナギサ　十六日、だっけ、本震の後、近くの小学校に避難してたんだってね。
ホトリ　うん。
ナギサ　そういうところって、どうなの？休めるの？
ホトリ　車中泊……車に乗ってるとさ、余震で酔うんだよねぇ。車、結構揺れるから。
あ、こうなって発見したことだけどさ、人って、上手にバランスをとって頭を支えているんだよね。
首とか腰とか使ってさ。頭だけだと、そのクッション性がよーくわかる。

ナギサ　車に居るよりはマシなのか。
ホトリ　知らない人でも、他に人がいるっていうことで……ホッとするよねぇ。
ナギサ　あぁ、そうか、うん、人とね、一緒に居る方が安心だよね。
ホトリ　私は声を出せないんだけど、
ナギサ　サトルさんと一緒になだけでも。
ホトリ　たたみ一畳分の段ボールと毛布が配られてたから、それを旦那ひとり分もらって、
教室の隅っこに段ボール敷いて、旦那が腰を下ろして
早く夜が明けないかなーって、
旦那も眠れなかっただろうな。
ナギサ　そうだね。
ホトリ　あの音がイヤだな。揺れる直前の地響き。あの音がした瞬間に、力が入らなくなる。
ナギサ　うん。
ホトリ　ズン……って揺れる度に、旦那が横に寝てる私に覆い被さって、守ってくれる。
ナギサ　うん。
ホトリ　あぁ……ナギサ、
ナギサ　なぁに？
ホトリ　もうさ、照れくさかったり恥ずかしかったりするようなこともこの際だから打ち明けようかな。
ナギサ　急になに。
ホトリ　うん……
ナギサ　まぁ、聞くけど。
ホトリ　姉妹でするのは恥ずかしいんだけど、私この先誰にも打ち明けられない、相談できない
だろうから。
ナギサ　サトルさんが聞いてくれるよ。
ホトリ　うんと……その旦那のことでさ。
ナギサ　あぁ、そうなの。上手くいってなかったの？

ホトリ　ううん、夫婦円満。
ナギサ　じゃ、いいじゃない。
ホトリ　何を考えてるんだかわからないような人だけど。
ナギサ　そうなんだ。
ホトリ　あのくれぐれも……ド下ネタだからね。
ナギサ　夫婦生活的な話？
ホトリ　んー、かなぁ。
ナギサ　そんなの聞きたくはないけど、いいよ聞くよ。
ホトリ　うーん……

ホトリ、そうは言ったものの、逡巡の表情。

ナギサ　聞くから。……後悔したくないからさ。
ホトリ　なんだよ、そんな言い方、もうすぐ私死ぬみたいじゃない。
ナギサ　でもわかんないじゃん。
ホトリ　はい、そういう話、金輪際禁止。
ナギサ　……言われたくないだろうけど、
ホトリ　私だって不安だよ。
ナギサ　……わかるけど。
ホトリ　理由がわからないってことはさ、恐怖だよね。
ナギサ　ん？
ホトリ　私がどうしてこんな形でも生きているのか。
　　果たして、どんなメカニズムで生きているのか。
ナギサ　不思議。
ホトリ　水を飲んでもいいのか？食べていいのか？

ナギサ　……。
ホトリ　毎分毎秒、死と隣り合わせの気分だよ。
ナギサ　ゴメン。
ホトリ　夢なのかなとか思っちゃうよ。
ナギサ　ゴメン。
ホトリ　アレも出来ない、コレも出来ないって考えちゃうから。
　　でも生き続けたら、ひょっとしたら首から何か手だか足だかみたいなものが生えてきて動いたり
　　できるかもしれないでしょ。
　　動物の進化ってそういうことじゃん。キリンが首長くなるとかさ。
ナギサ　何言ってるの。
ホトリ　「あああ」って言って頭を抱えることも出来ない。髪を掻きむしったりとか、
　　貧乏揺すりとか、そうやってイライラしたり、落ち込んだりするっていう行動が、
　　できないなって思った時に、もうそんなことしてる場合じゃないなって。
　　出来ないこと数えてる時間ももったいないから。
ナギサ　……ゴメン。
ホトリ　久々の姉妹水入らずでさ。せっかくの水入らずだから、いつも話さないようなさ、
　　膝付き合わせてさ。
ナギサ　そうだね。
ホトリ　その付き合わせる膝もないんだけど！
ナギサ　……。
ホトリ　私、この手の冗談、これから結構言うから。
ナギサ　……うん、徐々に馴れるよ。
ホトリ　よろしく。
ナギサ　……うん。
ホトリ　よし、話すぞ。

ナギサ　うん？
ホトリ　旦那の相談。
ナギサ　あぁ……そうだったね。
ホトリ　避難所で、旦那が私に覆い被さって守ってくれた時にその……固いモノが当たるんだよ。
ナギサ　固い。
ホトリ　最初アレ？って気付いて、
ナギサ　おぉ……
ホトリ　あの人……勃ってた。
ナギサ　おおぉ……反応しづらい話だ……
ホトリ　恥ずかしいけど、顔が赤くなってるのかの感じがもはやわからない……
ナギサ　興奮してたとか？
ホトリ　知らんけど。
ナギサ　疲れてたんじゃない？
ホトリ　疲れてるよ。そりゃあいろいろ続くから。いろいろあるから。寝てないし。
ナギサ　疲れだよ。
ホトリ　でも避難所だよ？避難してるのに。
ナギサ　そんなの生理現象だから。
ホトリ　ううん、それはいいんだ。
ナギサ　あぁ……もう、そういうことできない、とか。
ホトリ　自分の……そういう欲求？が今後どうなるのか、それはこれからだけど。
　　なんか考えちゃったわけよ。
ナギサ　うん。
ホトリ　ウチ、子ども、いないからさ。
ナギサ　……うん。
ホトリ　なんか、それがね。

ナギサ　……。
ホトリ　もう、可能性が、まったくないってのがね。
ナギサ　……可能性、ね……
ホトリ　文字通り、お腹を痛めて、が、もうないのかな。それがね、ショックっていうか。
ナギサ　そんなこと、今は考えなくてもいいよ。
ホトリ　そうなんだけどね。ちょっと……考えちゃうよね。
ナギサ　サトルさんは、どうだったの？子ども。
ホトリ　うん、欲しかったんじゃないかな……でも、私も働いてたし。
ナギサ　そうだね。
ホトリ　でも旦那はホラ、学生がよくウチに遊びに来てたし、学生が我が子みたいなこともあるのかな？どうだろ。
ナギサ　あぁ、あるかもね。
ホトリ　昨日の夜に、ここで、旦那がその机に座ってて、その後ろ姿を見ながらね、そんなこと考えてたんだよね……
そしたら、だんだん腹が立ってきて……自分ばっかり興奮しやがって、とか。
ナギサ　うーん。
ホトリ　あぁ、そうか、学生に夕飯をごちそうすることも出来なくなったかー。
ナギサ　できる！サトルさんに電話させて宅配とか振る舞っとけばよし！
ホトリ　なんとか……なるか！
ナギサ　なるなる！
ホトリ　なんていうかさー、先人が居ないことだからさ、開拓していかないとだよね。
ナギサ　先人は……いないだろうね。
ホトリ　あ、世界中に、首だけのお化けってのは結構いるんだよ。
お化けってか、妖怪……
ナギサ　妖怪？

ホトリ　んー、悪魔……
ナギサ　悪魔。
ホトリ　いやいや、妖精？
ナギサ　妖精。
ホトリ　あー……以前、ブータンっていう国に、旦那について行ったことがあったのね。
ナギサ　幸せの国……だよね。どこらへんだっけ？
ホトリ　うーん、まぁそうだね。チベット山脈の……えーっと、
　　中国とインドに挟まれてる所、って言ったらいいかな。
ナギサ　お土産も何かもらったよ。
ホトリ　うん、ブータンにも語り継がれてる民話というかね、思い出したのよ。
　　「シム」っていう首だけの魔女の話。
ナギサ　お姉ちゃん、自分がお化けみたいな言い方、やめよう。
ホトリ　え、あれ？ごめん。自分が覚えてることとかをこうやって話して記憶に留めようと思ってたくさん
　　喋ってるのよ。
　　身体がなくなって、記憶できる量が減っちゃったわけじゃないんだけどさ、
　　小さなことだけど、こうなってみたらやっぱり身体とか、いろんな感覚使って記憶してたんじゃない
　　かって不安になってきてさ。
ナギサ　あぁ、そういうことはあるかもしれんね。でも、
ホトリ　うん？
ナギサ　精神衛生上良くないから、自分をエイリアンみたいに言うのはやめよう。
ホトリ　エイリアン？
ナギサ　うん。
ホトリ　……黒尽くめのナギサに言われたくないけど。
ナギサ　しょうがないでしょ。
ホトリ　ハハハ、こうやって話してると、気が紛れるよ。ありがと。

ナギサ　あぁ、ごめんね、夜は斎場に行っちゃうから。
ホトリ　うん、今夜はミヤハラくんに話し相手になってもらうよ。
ナギサ　そうね。
ホトリ　頭だけになった、この小さなナリで、これから新しく湧き出るいろんなことを、全て飲み込んでいく決心をしたのさ。
ナギサ　まぁ……いっぺんにはアレだからさ。
ホトリ　そうだね。
ナギサ　困ったら、私も協力するから。
ホトリ　協力してもらわないと、もう手も足も出ないからさ。
ナギサ　……。
ホトリ　笑ってもいいよ。
ナギサ　……。
ホトリ　笑ってよ。
ナギサ　……じゃあ、笑おうかな。
ホトリ　フフ。
ナギサ　ンフフ。

微笑む二人。

ナギサ　お姉ちゃんの頭のこと……あぁ便宜的にごめんね、「頭」って言っちゃうけど。
ホトリ　うん。
ナギサ　頭だけになっても生きてることは、サトルさんと、私んトコ夫婦しか、あ、それと、ミヤハラさんしか知らないし、他に知らせるかは、今後話し合うことにしようって。そういう話に、サトルさんとなった。
ホトリ　オッケー。

ナギサ　誰もここに入って来ないよね？
ホトリ　大丈夫だと思うよ。そもそも建物に立ち入り禁止らしいから。
ナギサ　でも、こんな無防備に話してていいのかな……
ホトリ　ここでも誰か他人に見つからない様に、上のコレ（布）で隠せるようになってるんだけどさ。
ナギサ　あぁ、コレ。
ホトリ　あの時、私、旦那に抱えられて、近所の小学校に避難した。
　　途中の誰もいない小さな公園の水道で、首の血を洗い流してくれてる間もずっと、
　　旦那、私に話しかけてきてさ。「びっくりしたね、すごい揺れだったね」とか同じようなことを何度
　　も何度も話しかけるんだよ。私はそれに「うん、うん」って答えてて、
ナギサ　うん、
ホトリ　「痛くないの？」も結構聞いてきたな。「大丈夫、大丈夫」ってそれには答えて。
ナギサ　本当に痛くなかったの？
ホトリ　ちょっと痛いかもしれないなぁくらいで、コレまた不思議なものですよ。
　　あの日、私は生きてることを噛み締めて噛み締めて、ってやってたけど、
　　旦那のあの時の気持ちを考えたら、なんて言うの、
　　私が喋らなくなっちゃうのが怖くて？ずっと話しかけてたんだって思うよね。
ナギサ　あぁ、うん、そうだろうね。
ホトリ　不思議と、私は怖くなかったんだけど。
ナギサ　自分では。
ホトリ　……これも昨日の夜、新しく覚えたことだけどさ、
　　旦那が寂しがるのよ。私が隠されてると。それをね、また何かの実験の話でね、
　　たとえ話してくれたんだけど。なんか、猫を箱に入れて、生きてるか死んでるかって。
ナギサ　あぁ、知ってる知ってる。有名なヤツ。なんだっけ……
ホトリ　シュレーディンガー……だっけ？
ナギサ　そう、かな？それそれ。

ホトリ　箱の中の猫が生きてるか死んでるかは、箱を開けて観察した瞬間に決定するみたいな話をね、だから、私が隠れてると、それが見えないからって、開けっ放しにしてるわけよ。旦那と一緒に居るときは。

ナギサ　そうか。

ホトリ　そんなことない、って信じてるんだけど、私、珍しいことになっちゃったからさ。私、実験の対象になってる気がしちゃうよね。

ミヤハラが静かに戻ってくる。
手には何も持っていない。

ホトリ　あれ？

ミヤハラ　炊き出し、長蛇の列でした。一時間くらい待つかもって。

ホトリ　あらら。

ミヤハラ　その、（ナギサが）行かないといけないですよね？

ナギサ　あ、いや、よかったのに。

ミヤハラ　いえ、すぐ引き返してきちゃいました。

ナギサ　じゃあ、おにぎり、食べてください。

ミヤハラ　ありがとうございます。

ホトリ　ミヤハラくんにも聞いてみたいんだけどさ。

ミヤハラ　何でしょう。

ホトリ　私さぁ、病院で調べてもらうとかしてもらった方が、人の役に立つんじゃないかな。

ミヤハラ　そうかも、しれませんね。

ナギサ　え、どうするの？

ホトリ　例えば、大学なんだから、なんかそういう伝手みたいなのもきっとあるでしょ。

ナギサ　ま、あるだろうけどさ。

ミヤハラ　あー、いやぁ……
ホトリ　　え、役に立つんじゃないかな？何かしらのさ。
ミヤハラ　あぁ、そうかもしれないんですけど……あぁ……どうしよう。
ホトリ　　なに、どうしたのよ。
ミヤハラ　言うしかない！……ホトリさん、それは教授が厭がりますよ。
ホトリ　　……え、何かあるの？
ミヤハラ　その前にひとつ謝らなきゃならないんですが……
　　昨日、あんだけ言っておいて僕、あの教授の日記、読んじゃいまして。
ホトリ　　おっと。
ミヤハラ　すいません。
ホトリ　　内容を言わなければ……まぁ、いいよ。
ミヤハラ　教授の十六日からのことが、ずらーっと書いてありました。
　　さっきホトリさんが言った、頭だけで生きている人間を、科学的……医学的に調べてもらった方がいいのではないか、ってことについての気持ちも書いてありました。
ホトリ　　そっか……
ミヤハラ　教授は、ホトリさんをずっと、隠し続けると思います。
ホトリ　　そう……書いてあるの？
ミヤハラ　はい。
ナギサ　　私も、見ていいかな。

ナギサ、誰の返事も聞かずに、日記のノートを読む。

ホトリ　　あ！
ナギサ　　まぁまぁ。
ホトリ　　私も、読みたいんだけどさ。我慢してるんだから。

ナギサ　だから私が代わりに読んでおくよ。
ミヤハラ　日記読んで、教授の立場、っていうか、生き方に関わることなんだと思いました。
ホトリ　生き方？
ミヤハラ　例えば……あ、あのピッチドロップ実験を最初に始めたメインストーン教授は、とうとうピッチが滴り落ちる瞬間を目撃できなかったそうですよ。
ホトリ　……うん。
ミヤハラ　でも今も別の教授が後を引き継いで、実験は続いてるんです。
僕、昨日、冗談みたいな実験だって言ったかもしれないですけど、
実験の意味というか、実験結果というか、
「一見、固体だと思ってたものが、ゆっくり滴り落ちる」っていうのを、たとえ自分が見られなくてもやろう、っていう執念というか……使命感っていうか……
ここで、自分でも同じ実験やるって、確かにアスファルトの性質を僕たちに伝える、ってのとかもありますけど……
教授って、というか、大学って、うーん、なんか少なからず、そういうことあるかなって。人の英知を、後の世に伝える使命というのか。
ホトリ　うん、旦那ははっきり言ってそういうところあるよ。
時間軸が違うっていうのかなぁ。
ミヤハラ　でも、そんな教授が、ホトリさんを手放したくないって、
ホトリ　……うん。
ミヤハラ　そう書いてらっしゃるんですよ。
ホトリ　そうか。へぇ。
ナギサ　……あ、あった。
「首だけになった妻の、その仕組みはどうなっているのか。
もし、そのメカニズムが解明されたなら、人類の大発見のひとつとなるのではないだろうか。
しかし私は、これから一生、彼女とともに過ごせる方法を模索していくことを決心した。この決心

が、人間として正しいことなのか、正直わからない。
でも、あの避難所の夜、余震の度に彼女を抱き寄せる度にそう強く思ったのだ」
ホトリ　はぁ。マジですか。
ナギサ　マジマジ。
ホトリ　ほえー。
ミヤハラ　あの……教授には、僕が日記読んだこと、ナイショで……
ホトリ　うん、私も聞かなかったことにするよ。
ミヤハラ　はい。
ホトリ　そうか……一緒には居るけどさ……
今後、いろんな壁が待ち受けているんだろうな。
ナギサ　そうだね。
ホトリ　ミヤハラくん。
ミヤハラ　はい。
ホトリ　首のない鶏の話、さっきしてくれたじゃない。
ミヤハラ　あぁ。首なし鶏マイク。
ホトリ　首から下だけ、生きても良かったのにさぁ。
ミヤハラ　あぁ。
ホトリ　首から下だったら……そん時はそん時でどうにか生きていっただろうけど。
頭の方が残って、私、よかったな。
ミヤハラ　そうですか。
ホトリ　見えるし。聞こえるし。喋れるし。
ミヤハラ　昨日ここに来て、ホトリさんが♪なんでだろーって歌ってたから、
僕、すごく救われたんすよ。
ホトリ　ほへー。
ミヤハラ　はい。

ホトリ　やった、救った！
ミヤハラ　救われましたよ。
ホトリ　頭だけでも生きてるから、出来ることだよね。
ミヤハラ　はい。
ホトリ　よし。何か、他に出来ること探そう。
ナギサ　あ、お姉ちゃん、これとかどう？

ナギサ、自分が持参したおもちゃの吹き戻しをホトリに銜えさせる。
ホトリ、精一杯吹く。一同、沸く。
ナギサとミヤハラ、他にもホトリの頭に帽子をかぶせたり、
シャボン玉を吹かせたり、試してみる。
そこへ、ミドリカワがやって来る。

ミドリ　……あ……
3人　！……
ミドリ　ホトリさん……ホトリさんですよね？
ミヤハラ　あ……あれ、ドリさん、
ミドリ　え、どうなってるんですか？
ミヤハラ　あのですねドリさん、
ミドリ　大学から教授の奥様が亡くなったって聞いてさ。作業途中で切り上げさせてもらったんだけど……
ホトリ　ミヤハラくん。
ミヤハラ　え？
ホトリ　さっそく、最初の壁が来た。
ミヤハラ　壁？
ホトリ　よし。とにかく説明をするぞ。
逃げることなんかできないからさ。

だって、

ミヤハラ　逃げる足がない、ですからね。

ミドリ　おい、どういうこと……

ホトリ　ハハハ……

３人　ハハハハハ……

ミドリ　え？なになに？ちょっと、（ホトリに近づいて）どうなってるの？え？

驚きの表情のミドリカワと、微笑む三人の顔。

おわり